

雙魚全漫錄

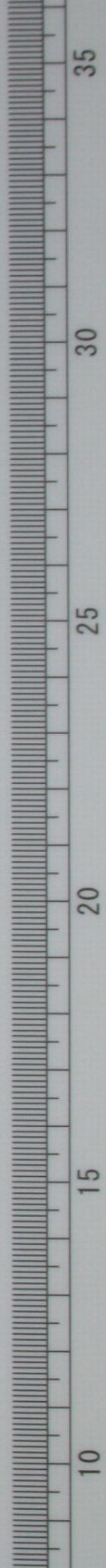
二

特別

14

1919

236





元四の形を有るを借り其の版式を  
 換言して之を挿入せんと擬して天因快  
 後其より原を以て送りし事。一、これ程に  
 あり一見するをゆゑと、横考(考考)を  
 する(七)のちうをよむ程を補考あること一  
 く延徳再版の而つけをぬすまはし稀  
 散のちうを五山版の儒者書明代を寧  
 る古しと雖も印を世に一と見え下  
 ちるもつて之を承るる程に徳へて是る  
 ものあるをせよ、か、詳細を天因快  
 子所、説をゆゑのせんハ考考をせよ

東林風

延徳板大學卷尾

(西村時彦氏所藏)

後得十五年前四章統論細願旨  
 後亦其細論條目工夫其第五  
 乃明善之要第六章乃誠身之末  
 在初學尤為章務之急讀者不可  
 以其近而忽之也

續字

宋學の首倡

(三十一)

天因生

日本最初の  
大學刊行(天)

伊地知本大學、文明板と延  
徳板、朱子著書刊行の祖

桂庵薩摩に在ること四年にして、文明十三年に  
は、國老伊地知左衛門尉重貞と謀りて、朱子の大  
學章句を刊行せり、之を伊地知本大學、又は文明  
板大學と曰ふ、是れ我が邦に於ける朱子の著書  
を刊行せし先鞭なり。

伊地知重貞は島山重忠の兄重光の末孫にして、  
其の祖先越前の井筒城に居りしことあり、井筒  
轉訛して伊地知を名乗るけるが、世々鎌倉幕府  
の右筆たり、重貞の時罪を得て來りて島津氏に  
仕へし者あり、後ち國老と爲りし家筋にて、重貞  
は桂庵に學びてより、深く程朱を信じ、遂に師の  
勅に従ひ、資を捐て、此の書を刻せしなるべし、  
豈不朽の盛事に非ずや。

く、字の大きき三分餘、楷法端正、筆氣温雅な  
り、註の字の大ききも本文と同じく、只一字を下

げ、右經一章は二字を下げ、凡傳文云々は三字を  
下げたり、潜隱の説に云く、此は本文に連ねて  
註をも讀しめんと爲にして、薩藩の素讀法は今  
も亦然り、蓋し古の遺俗なりと、卷尾には左  
の文あり。

文明龍集辛丑夏六月左衛門尉平氏伊地知口(氏の字か)  
重貞命工鐫梓於薩州鹿兒島  
延徳王子孟冬桂樹禪院再刊

文明鏤梓の三行三十字は、行書にして小さし、  
蓋し重貞の自署なるべし、延徳再刊の二行十二  
字は、楷書にして本文と同形同筆なり、潜隱は本  
書の字を以て桂庵の自筆なるべしと爲せり、今  
其の再刊の記の本文と同筆なるに徴すれば、桂  
庵手蹟の説、確乎動す可らず、豈貴重すべき古本  
ならずや。

按するに南北朝以來二百三十四十年間は、戦亂相  
隨きて、文教振はず、此の時に當りて風氣早く開  
け、文化觀る可き者は、京師を除くの外、海内唯  
泉州堺、防州山口、薩州鹿兒島の三處あるのみ、  
三處は外國交通の門戸にして、文物輸入の便あり

文明板大學は伊地知潜隱の推想せし如く、當時  
盛に薩州三州に行はれたりしと覺しく、十餘  
年の後には、其の板已に磨滅して用ふ可らざり  
しより、桂庵は更に延徳四年(此の歲改元明應)  
を以て、其の桂樹禪院に再刊したりき、之を延徳  
板大學と曰ふ、文明板大學は、天保中に潜隱力を  
捜訪に盡すも、得る所なかりきと云へば、早く已  
に亡せて存せざりけん、延徳板大學すら、當時希  
有の物たり、況や今日をや、殆ど學界の至寶た  
り、予が月川に獲たりし藏本の奥書に曰く。

此一冊サ州羽月村大聖寺從三住持被下候持主、同  
村號ハ若王寺住僧東持院頼傳之  
慶長十二年丙午霖雨八日給之

羽月は伊佐郡に屬し、世尊山大聖寺は曹洞宗の  
福昌寺末にして、熊野山東持院若王寺は、眞言宗  
の大乗院末なり、延徳四年より慶長十一年まで  
百十五年にして、慶長十一年より今年迄三百五  
十年、合して約四百二十年の星霜を経たれば、蠹蝕  
に加ふるに頑童の塗抹を以てす、善本に非すと  
雖も、罕觀の靈物、寶護せざる可らず、本書の板  
式は、外廓横四寸二分、堅五寸三分、折目には、  
上に大學の二字、下に丁數を記し、行間に界な

東本願寺

り、資力も亦隨て裕なりしが爲なり、京師五山  
の文學は、朝幕の外護に依倚して、刊書の業も亦  
興り、世に之を五山板と稱したるが、其の書は虎  
關が聚分齋略を除くの外、概ね皆禪書にして、未  
だ儒書に及ばず、當時儒書を刻したるは、正平十  
九年甲辰、泉州堺の道祖居士が刻せる論語集解  
を始と爲す、世之を正平板論語と曰ふ、後ち百七  
十餘年後の天文二年に、同書を刻せしも亦清原  
宣賢が所謂泉州の佳士にあらずや、世之を天文  
板論語と曰ふ、所謂大内本は義隆の時に在りて、  
亦天文中に屬す、今此の文明板大學は、正平板論  
語に後ること百十七年、天文板論語に先つこ  
と五十三年にして、鉛葉史上に重要な地位を  
占むるのみならず、正平天文、並に古註に屬し、  
其の程朱學派の神髓たる四書の一部を刻したる  
は、實に此の文明板大學章句に始まれり、四書を  
讀むに、大學を先にして中庸論語孟に及ぶは幼學  
の順序なり、是れ蓋し古來の定法にして、義堂も  
亦嘗て之を養浦に告げたりき、桂庵先づ大學を  
刻せしは、其順序に據りしものなるべきも、朱子  
を宗とせざれば元と學に非ずとまで信じたる桂





あまのりやの御年其女も我々者なりし也  
見えり抄記原の主人と云ふ字七音のまゝ  
字を供出印を別段見るとおまゝ銘を  
記し終る抄記原に脱化しと云ふと  
記しと云ふと前年所載の補遺と云ふ



余秋吉印翻載する年の  
浦倣阿志の印を愛す  
決りなまよはしに換刻せし  
らるゝと云ふ即ち是れ余印  
鑑査印一大きに換印

漢委奴國

の如し換印石杖、原印と若くして強ん  
と云ふ也と云ふるなり(四十五年三月十日記)



漢委奴國王の金印是れ也  
存るまのしりるをと帝家  
信物録に於て中井敏下  
換印と作す一は印杖其  
銚と云ふを換了余委奴又  
次印をも其後、作らる  
換杖一を好むんを為る也  
以るまのしりる換刻を杖

して未比成とす 撰刻するの日に、二、三、拾し  
原印と對照せんことを祈し、先づ原印  
影と當り換印成るの日に、結つて、その  
〇唐瀬海家 四言 終を冷い、冷いも余の  
よふふふ、こゝろ、同し、ことを言ひ、んを  
人をおとす、と、未、常、と、朝、と、あ、と、  
野、と、せ、と、と、照、と、海、天、の、り、と、於、と、  
之、と、幹、持、と、視、と、と、其、率、と、最、と、う、と、  
学、士、文、と、を、る、と、一、語、と、を、と、字、と、を、幹、持、と、  
免、れ、と、と、圓、子、の、旗、句、と、若、子、と、位、と、  
乃、ち、見、と、と、と、と、と、と、



○退方印類十五冊汪啓淑印譜  
巻し十二印譜中の一也、序文を案する  
所修を案右の二印譜も次に出るもの  
類と分つことあり

- |        |        |
|--------|--------|
| 一 金銀類  | 二 象牙石類 |
| 三 晶玉類  | 四 名刺類  |
| 五 凍石類  | 六 牙角類  |
| 七 次瓦器類 | 八 名印類  |



世に凡ては龍家七松  
山を平家少子の説き遊侠子  
如くは松又くは家説的樹  
塊鄭實士  
在吹凡七松石也

○此の劉誠雲龍家の筆元又文お中を記  
しおつしりちくすまふ中にお泥并  
文(るりし印刷しせし出なるま)七十数類  
あしお泥と知る心みるもナシくしき  
しつらと一目め心なることを新しゆし巻

文と牛骨の刻しなるもの多分の代  
一振りの作と断しうたも七松  
きいもの也

○唐のゆき松竹田田能村の刀痕を記  
る茶果三点を高くしすう買ぬと  
示すとえんは海松も山も也  
兼るしお赤梅の茶統五寸経二十三四  
寸各個を茶と刻し空然同し  
湯緒梅の式を自也又茶を刻す  
(此分茶者直入山人)如湯各一巻し  
三寸寸の茶葉すお梅



の手腕と云ふを念ひするに、  
且つ此の動流の形も、  
へと他の印流も、  
然し此の印流も、  
由りて印流も、  
り此の印流も、  
さういふも、  
かや、  
係りて、  
と、  
得る。一片を手に、

を、  
七、  
け、  
と、  
と、  
出、  
お、  
め、  
の、  
骨、  
と、











そのこと果然と云ふ能く又いふに  
吉福の一色も猶うそそぬのさあは成  
ひあふ、いんを也いふとる久あひあひの  
むも保あふしとまきく又あひのいふ  
感ていふのむ吉福癖のゆ波として  
此のあふあひのゆゆ人、あふあひ  
わあひ  
○前掲けはる竹田茶茶、心動き竹田  
村、高き竹田湯を土出る茶  
部もえと他の二とて戸門もいふこと  
一の又め代も本意しと云ふ、保るあ

東林園

会了

此二茶、石山高(湯籠を括しあふ)茶  
屋(湯を括しあふ)の二印を括す、誰ん  
印、いふとく、竹田自草の袖珍  
版本保案集湯を括しあふ、平  
すいあふと、いんを括しあふ、前す、  
竹田自草の茶院を載む、故す、  
石山、茶茶真(湯籠)と載む、故す、  
茶茶、いふ、福州、保士、伝  
火物、仙、保、傳、とあふ、其、内、茶、茶、  
石山高の印、を、括、す、



○坊間之散策一と專公の元次山碑、拓本二冊  
 を得、表装古拙、扇拓ニ亦應心し。楊守敬  
 の題、其美ありし、其尾、も同人の題、汝ありと  
 善し。楊の手澤本也。題汝と曰く  
 專公諸碑半、經後人重開、唯宋  
 廣平碑、段君夫人碑、及此碑尚  
 未經重復、蓋全、顧宋段二碑、磨滅  
 過甚、唯此碑尚多完字、良由碑  
 在魯山、椎拓者少、故耳。然近本、識  
 度、竊覺、此為碑、其美、應、神  
 采、奕、奕、顧書者、高、而、此、間

東林原表

津矣

同法丁卯宣布楊守敬記

□ □

○此、初、重、重、安、侯、翁、の、中、を、同、書、後、記、念、の、  
 處、上、に、多、く、一、念、早、と、興、う、し、て、語、る、余、の、  
 二、湖、を、伊、知、地、を、う、る、を、以、て、う、る、翁、の、  
 意、を、う、る、也、此、を、稀、也、余、の、  
 唯、二、あり、一、を、伊、知、地、の、  
 年、休、あ、一、を、伊、知、地、の、碑、文、を、  
 其、の、謝、也、其、の、を、  
 也、之、某

家々をたふし、おろし、村々の門人の如き  
ありし、此れ、ついで、文之、ちと、皆、村  
を、に、を、傳、ふ、ある、各、提、言、る、り、と、後、に  
を、研、究、せ、ん、為、支、那、は、諸、人、し、九、家  
を、過、き、る、諸、府、の、事、地、を、論、し、其、の、家  
傳、の、一、種、の、点、を、つ、け、る、所、を、漢、文、を  
用、て、大、い、に、考、き、り、し、り、し、後、に、既、に、記、す  
迄、研、究、し、ある、上、を、海、航、と、い、ふ、也、す  
と、引、込、り、し、り、し、り、の、事、を、考、へ、り、し、り、  
お、又、甲、乙、南、北、相、違、り、し、り、し、り、と、是、れ、と、  
池、の、事、を、記、す、り、し、り、し、り、の、事、を、考、へ、り、し、り、

又、唐、し、り、し、り、の、事、を、考、へ、り、し、り、  
ん、り、し、り、の、事、を、考、へ、り、し、り、  
唐、の、董、仲、と、あ、る、方、の、兵、士、の、活、動、を、大  
に、考、へ、り、し、り、の、事、を、考、へ、り、し、り、  
北、唐、の、と、あ、る、池、氏、の、推、首、を、い、ふ、事、を、考、へ、り、し、り、  
り、し、り、の、事、を、考、へ、り、し、り、  
く、考、へ、り、し、り、の、事、を、考、へ、り、し、り、  
し、り、の、事、を、考、へ、り、し、り、  
朱、子、子、子、を、考、へ、り、し、り、  
と、い、ふ、事、を、考、へ、り、し、り、  
唐、の、勢、力、を、考、へ、り、し、り、



- 式亭三馬日記 文化八年歲次辛未  
自正月至五月中旬
- 柳亭日記
- 惺々曉斎日記
- 村田了河花多日記
- 輪池日記

東  
森  
原  
集

- 聚磨日記 寛政十三年庚申日記
- 聖巢日記 市村月峯日記
- 赤久幹日記 二冊
- 様画後記 三巻
- 華山後記 寺耕模
- 春田五洲雜記
- 越前高雜記
- 位吉内記日記
- 月峯日記
- 伴存二番夫人日記
- 蜀山多針日記





○其枚者の爲に成し三弦の鏡を撥ぶ其波  
と云ふはさるる先なる記しなりし其後倭  
板の改りたるに成るしと云ふ事一の坪  
由成道に分海の形お海の文にさるる事  
是より五る守波と云ふ後七百人自千載  
波をいふ事さるる事と云ふ事さるる事  
の其の鏡のくつもの事さるる事と云ふ  
波の鏡の事さるる事と改りたる事  
後と云ふ事さるる事と云ふ事さるる事  
千手波の事さるる事と云ふ事さるる事  
年と云ふ事さるる事と云ふ事さるる事

東洋製

一乃の故に成し改るる事さるる事  
うり潮と云ふ事さるる事と云ふ事  
んと云ふ事さるる事と云ふ事  
○水波石塊の潤滑一粒の刻を濁す石  
塊と云ふ事さるる事と云ふ事  
刻と云ふ事さるる事と云ふ事  
朱白の文の印を濁す石塊の  
事の代に成る事さるる事と云ふ事  
と云ふ事さるる事と云ふ事  
らんを爲し得んと云ふ事さるる事  
出ると云ふ事さるる事と云ふ事

の宛ある多し此の事とせむに余も戦はる日  
く老翁代論と先生らりて下りたる也  
る事別々松尾院に於て洗心や鑿術術をや  
先生書あるはあつて代論を以てする事  
と互いに一見し後石塊化の家印一二顆  
を以て刻法<sup>本</sup>とせむも爪筋揃ふごと  
く有款なる也流石と毛筆の長  
この御書より松尾も拙きもの石塊の家  
刻家とておあり地味をよむる美  
あつて

○言ふ松尾と江戸印の事石塊の事

松尾

流る松尾とある家の文に石を  
るおまゝの録取へし〜んをわが互ひにお  
流しせよふかき〜んをわが互ひにお  
言ひ流天のりゆるといふ松尾甚  
村のあり像を画き上りせむと向井  
首を以てし〜ん消本一枚と好む  
書とすあるふかき〜ん和漢し也其殊  
る流し強んとあるの書とてあつて  
〜ん松尾書山家と仰山流と云ふ  
し〜んを山家の画とてあつて  
左右とある〜ん也〜ん此の節



既ししつゝの教ねるも、即ち左にぬる  
とすお、此の絶ちしとあるも、此の目八の前  
草守一甚とあるとありとすもなるも  
とすふ

○五峰と上野、此の旅行に今しぬる  
く海元、五峰、余の示す、今、おぼろ  
視、此の作ねるを、未だ、以て余  
す、五峰、の、服、を、ぬ、る、此、の、教  
る、の、心、を、教、ね、し、ぬ、る、也、と  
す、し、堂、々、と、す、る、也、と、す、る、也、と  
七、六、也、と、す、る、也、と、す、る、也、と、す、る、也、と

東  
林  
寺



小

酒

舞

九

子

子

子



Small vertical text or characters on the right edge of the page.



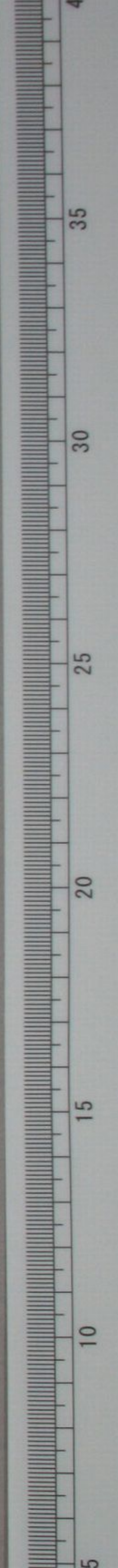
Handwritten calligraphic text, possibly a signature or a name, written vertically in black ink.

Handwritten calligraphic text, possibly a signature or a name, written vertically in black ink.

Handwritten calligraphic text, possibly a signature or a name, written vertically in black ink.

Handwritten calligraphic text, possibly a signature or a name, written vertically in black ink.

Handwritten calligraphic text, possibly a signature or a name, written vertically in black ink.

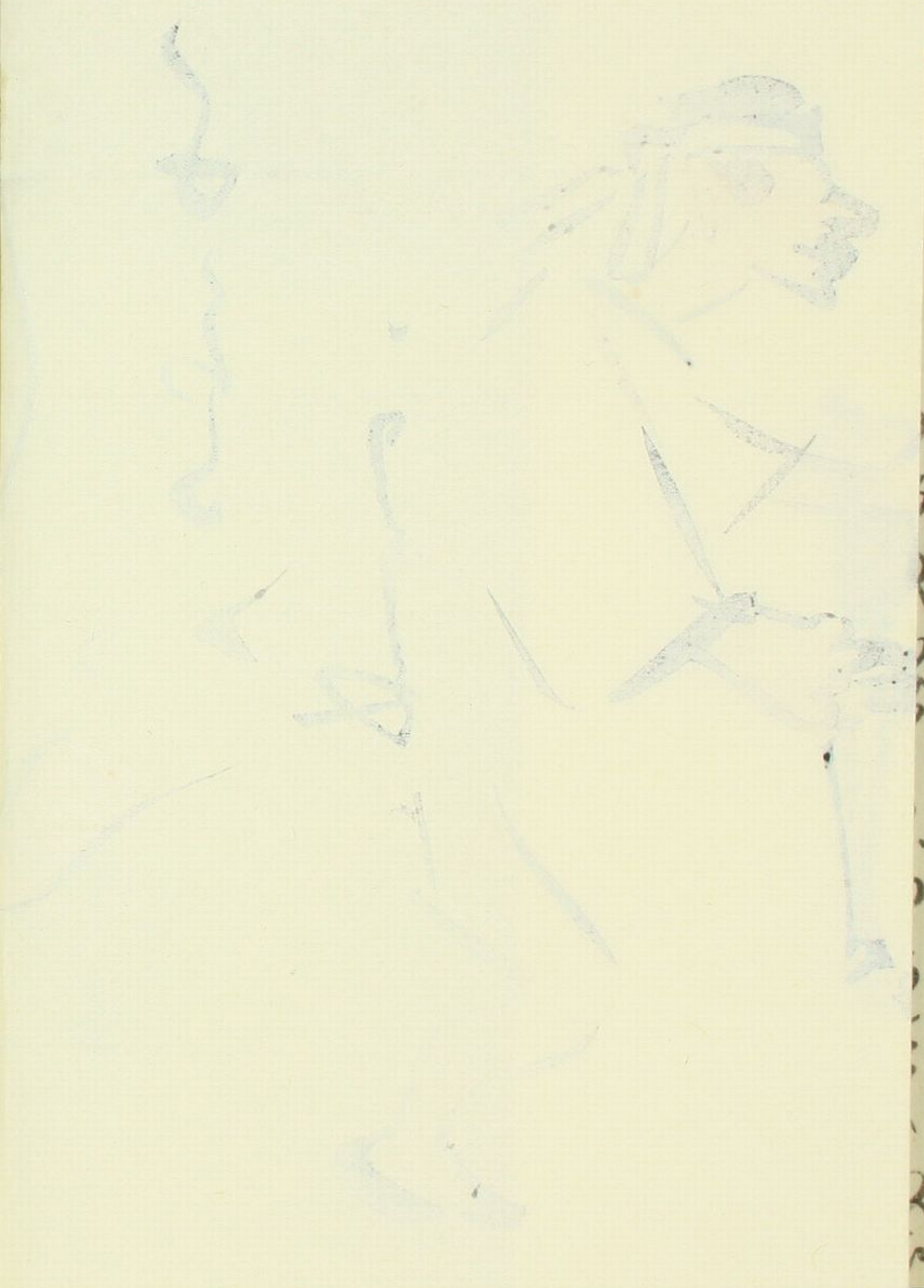


と五峰山中一の塵芥をくみん中の一  
塵代名賢の詩集に混入す  
ぬまむらさきのあまのこ

清河陣中

柳雨山は涼葉の緑は瓜一筋の  
昔は埃の吹く處に拍手言  
呼ばるる河  
解肉新土久矣政は世の多し  
河は比るに唇を柱は味高に  
爪挽子魚

河津堡陣中



黃河河奔奔，戰雲平河，存門西  
大漢橫陣，勢去蛇三，百里能隨，車  
走海如成

星言素列，望海納，望陣於時  
九日若天，忽地西風，隨着了戰  
野，先動極成，色海城也地也

出六世

擊沉高，只出夏，行長低，必於一千  
程五游，以清機，擬訪於心，秋前  
烈名不終

金家屯陣中說里木大均

弟賊素素，素素為確，此本端不，在  
從內真，又以此悔，書生兒，破敵連，在  
仰士切，八陣，今新，星劃，心系，詩  
馳驟，若若，休教，魏絳，行集  
策一戰，皆也，折回，口忠

讀書

征埃兮，黃黃，此，學也，州人，三馬一  
回，首，若，守，關，石，二，溪，都，壯，道，甲  
十二，創業，能，博，恰，橋，山，花，劍，馬  
出，觀，我，原，廢，為，相，衣，冠，扶，顛  
古，費，策，牛，力，能，西，沈，下，柱，空



遼功

玄菟樂浪肩髀可及此水休於東  
奚緬回洛祖建都此有唐皇  
駘驛山泯江流王氣年光悠  
粹旌旆多奇聖方文物城郭  
古如存年表の年終未迄

開系

浚寒凡空の四やり軍中一為  
通子多確心直是言於邦南  
臥黃就方ふ本

城峯

積甲山言案塚雁般深梯險轉  
輪通淺延誰迄萬葉主生此轉  
彭石階切

○大印有七印しし長之海の印漢二冊と  
略し大方印と久人海防の久人三海の人也  
北印漢と大方印とえ海の印と見し指し  
日字の一冊三海の和印と輯の一冊多  
く何人の刻と輯し三海印改味と  
又自の印を作し中々又三海の印と  
すまふ用ゆるそのしめ持たぬ自前の印





とありつてあるとありつて張る張する位の子  
を以つて満ちて何可也又研竟生のつらう人  
をんいそいそに経書を讀むに均しとて思ふも  
也先の大伴入のる宋とて注書人一切を  
ふらふしとてその危存あるまらぬと道遠  
曰く世とて余も道遠のたのみのつら  
と果さむとてその危存あるまらぬと道遠  
とありつてあるとありつて張る張する位の子  
を以つて満ちて何可也又研竟生のつらう人  
をんいそいそに経書を讀むに均しとて思ふも  
也先の大伴入のる宋とて注書人一切を  
ふらふしとてその危存あるまらぬと道遠

聖徳太子

稱しと欲れども余の欲ぬの事余  
一はまのりまのり亭所あるも又氣ふ故を  
為すことすこととあるとあると道遠しとて

(四十二年四月四日)

○此の路上寺の上にあるとありつてあると  
火のつと光のつとありつてあるとありつて  
三つと光のつとありつてあるとありつて  
とありつてあるとありつてあるとありつて  
洗心亭(加賀の寺)のつとありつてあると  
ありつてあるとありつてあるとありつて  
ありつてあるとありつてあるとありつて

思ふに不係し種族の多る相するに  
 草草のめがたえくわさし三行の一家集  
 するまはるのほくさるの因の記の麻由  
 (方取の)方よの相る一程あるよし又草  
 草草のの記三冊をいへるも月日廿七日  
 の午ふたれうて平東の人のまをるを  
 ありまのしるまよの未のえらんも  
 相しきこも也(四月ある)



赤長  
 任印

款云

西尾海氏有此記  
 余師其妻也



赤長  
 中史

卯十二月廿一日  
 赤長

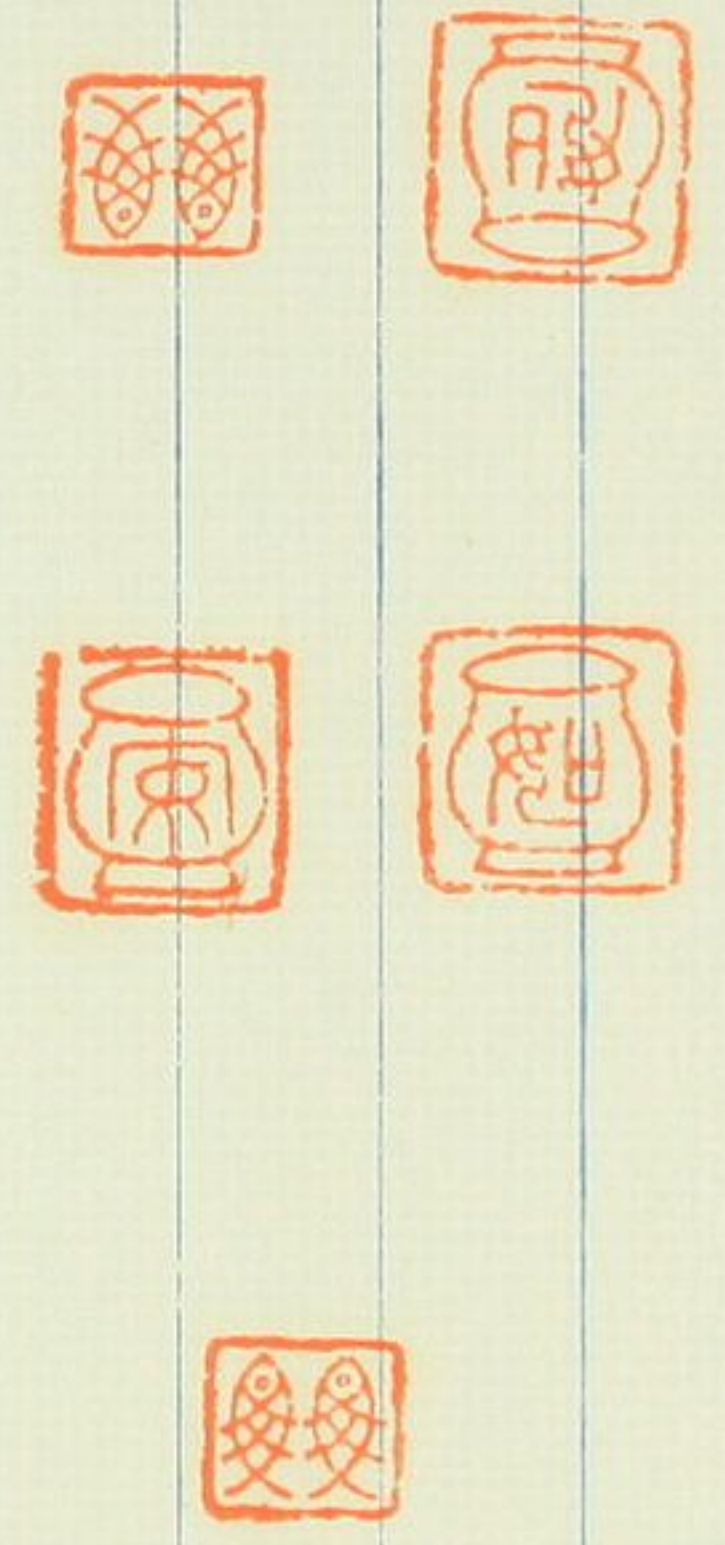
朱文印款云  
 佛法西尾陳氏奉刀



第を所の月廿五日  
 不印教類をよす  
 類をえりるを  
 印面刻極め自後款云



へうが、北の一塊を、し、林虫葉の四の標  
 緯を、大申、の所、し、る、結果也、余、道、  
 入、秋、ち、る、る、た、野、の、中、入、山、皴、の、あ  
 ー、く、不、出、来、る、る、る、石、松、を、植、へ、て、路、ハ  
 バ、好、個、景、中、の、活、涼、劇、る、ん、と、ま、小  
 を、次、て、す、余、も、形、ま、む、程、の、一、塊、を、活  
 柄、を、見、ん、と、ん、考、え、ん、文、を、何、と、い、ふ、



東洋風

右三點、皆、古、銘、用、す、近、の、刻、は、保、の、瓶、中  
 の、如、く、舟、口、如、瓶、の、略、瓶、中、の、あ、る、瓶、平  
 安、の、意、亦、安、印、を、秋、衣、印、刺、刺、す、不  
 如、瓶、と、す、近、の、う、風、を、と、お、減、ゆ、と、  
 一、と、山、瓶、の、印、印、を、何、と、い、ふ、  
 ○ 相、合、ら、る、る、る、る、三、升、念、二、三、次、の、書、  
 各、一、個、を、終、る、る、終、る、る、ウ、ン、ギ、リ、と、名、つ、け  
 切、子、を、入、れ、胸、を、さ、け、る、あ、る、る、る、る、似、を  
 白、丸、の、外、を、巧、み、く、く、と、中、の、法、を、塗、り、  
 漆、と、し、て、作、磨、せ、と、考、し、ま、る、る、三、次

印と傳古の歌うとて浦女く刺しぬちしこ  
んを海神おの家の巻(ち)りて  
と道おのよらしとと致うきらん  
たしと云ふ。二三流と十八た道一  
之作あるう通科伊勢伝宗三  
和嶋、後采思又思致とそふ  
三年致、二三流の家と淡也  
五代目伊勢伝宗三の出見世也  
又二三流作あるとの傳歴と文  
子の歌見世し相存しと二枚  
文政十年十一月の原崎序と  
三作

東海道

道み新ぬえ市村を無つら  
道を出巻丸三十七年也此  
入り松竹のこのるも二二三流  
芝をるおのちふも、坊名  
こと入るう思ひなると  
うもちしやのこのるも  
う世もこのるも  
○歌うの傳其ころも甲  
きしちけしと輕けと  
と重ぬる見ゆとあふ  
右七ちの









作の和歌も流くを思ふる中歌の  
の古例も~~も~~こころもけれん見え  
改らるる中歌の存るも也然る  
の御もとの文

こころもおいそがいにいとふ縁を  
首のあゝ馬路の大人の傳をう流  
一と生徒の勿論初生一何の種  
益を多しこと読まずいこゝも  
謝の○りより早業(初)好々大  
くまをもちとめかるといふは  
あつたきこと平にふゆ

東葉  
集

と多しき生徒一日も代を御  
一とせんあ

あ

こが好るういろはみえ

かほほしきかをうは

あうきく

ま

あつたあつた

あつたあつた

あつたあつた







○二茶と結丹より御座るは一茶所不快の境也  
りありしこと修んも知る意也あゝるけはる  
七考り化は一茶ある家入あるも子孫は  
り教えり、中一茶ある(七)と立言りる  
條ありし一僕人として懐かしくも  
おそや村り修めしおそく其のくそを  
を言し書らん存るぬむと云々

四月二十七日

一五七五日記

文化七年五月十日  
二節 日十七日

十七日

毛野村

滝沢二海

是のよきと常ちらきと本末一也  
と向う仏といふこと僅か墨をり  
りといふかゝるは湖を白とせり  
二十家といふことあり





A blank ledger page with a blue border and 12 vertical columns. A small blue triangular mark is visible on the left edge.

A blank ledger page with a blue border and 12 vertical columns. A small blue triangular mark is visible on the right edge.

東林風集

以下全て  
白紙

